

現代社会における宿坊の性質と実態に関する研究 -参詣・経営・観光・建築の視点を通じて-

A STUDY ON THE PROPERTIES AND THE REALITIES OF SHUKUBO IN THE MODERN SOCIETY -THROUGH PERSPECTIVES OF PILGRIMAGE, MANAGEMENT, TOURISM AND ARCHITECTURE-

建築デザイン分野 中嶋 純一
Architectural Design Junichi NAKAJIMA

観光客の増加と寺社をめぐる経営環境の変化により、江戸期に隆盛を極めた宿坊が注目されている。既往研究において宿坊の建築学や観光学といった専門分野別の研究はなされてきたが、俯瞰的に宿坊を捉え、その全体像を明らかにしたものはない。本研究は宿坊を参詣という歴史的側面及び、経営・観光・建築から宿坊の実態をみることによって他の宿泊施設にはない宿坊の特質を浮き彫りにする。そこから「寺社参拝者向けの宿泊施設」以上の今後の宿坊の展開を探る。

Due to the increasing number of tourists and changes of temple's and shrine's management, Shukubo flourished in the Edo Period draw attention again. Previous studies about Shukubo by specialized fields such as architecture and tourism have been done. However, there is no studies that captured Shukubo in a bird's-eye view and getting the whole picture. In this study, highlights the characteristics of Shukubo that doesn't exist in other accommodations by looking from pilgrimage history and management, tourism and architecture. From there, explore the development of the future of Shukubo over "Accommodations of temples and shrines for pilgrims".

1. 序論

1-1. 研究の背景と目的

日本の2018年の訪日外国人数は3119万人と統計史上過去最高を記録した¹。政府は2020年には4000万人を目標にしている。今後、観光客増加に伴い様々なニーズに合った宿泊施設の新設が予想される。日本では古くから宿坊という宿泊施設が存在する。その昔、江戸時代に隆盛を極めたが、明治時代の過激な仏教排斥運動により、宿坊は壊滅的な打撃を被ったとされる。その後、物見遊山的な観光旅行から体験型の観光旅行へと転換する過程に加え、上記の社会状況の中で近年宿坊が注目されている。

これまでに宿坊の専門分野別の研究はみられるが、俯瞰的に宿坊を捉え、その全体像を明らかにした研究はない。一般的に宿坊は「寺社参拝者向けの宿泊施設」といった認識に留まっている。しかしながら、宿坊には宿坊にしかない特質がある。旅館には本堂や神殿といった空間はないが、多くの宿坊には見受けられる。そのような宿坊独自の特質は埋もれている。その特質は宿坊の不変的な性質と現代における宿坊の実態の二つの要素から成り立つ。性質は参詣史から、実態は宿坊経営の機運の高まり、体験型観光の対象としての注目、多様な建築形態の存在という点から説明できる。

宿坊の特質を正確に捉えることは、今後の運営や新設、世間の人々に宿坊の魅力を伝える際の一助となるのではないかと。本論文ではそういった視座で宿坊の性質を参詣史から、現代における宿坊の実態を経営・観光・建築の視点から明らかにしたうえで、それらの相互の関係性を考察し、宿坊の特質の明確化と現代における新たな定義づけを目的とする。

1-2. 研究の対象と方法

仏教には様々な宗派が存在するが、近現代に成立した新宗教は省き、宗教団体法交付以前に公認されていた13宗²と神道を対象とする。研究方法を図1に示す。

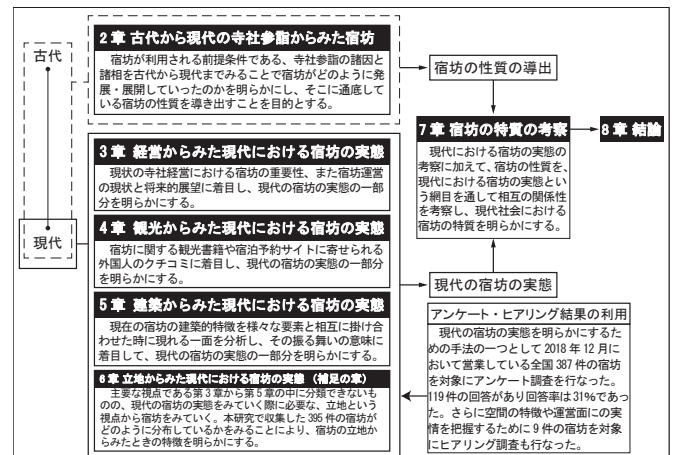


図1 研究の流れ

2. 古代から現代の寺社参詣からみた宿坊

2-1. 古代から現代までの寺社参詣

古代では遠隔参詣に登場するものは僧侶を除けば貴族階級であった。永保元年（1081）に藤原為房が記した『大御記』や藤原宗忠の『中右記』に宿坊に宿泊したことが記されている。ここに宿坊の原型としての存在が確認できる。

中世に入り参詣は著しく発展するがそれには諸々の前提・原因となるものが存在した。遠隔参詣において宿坊の存在はやはり欠かせないもので、現在にも残る宿坊街の形成は中世に端を発する。特徴的であるのは寺社の財政的欲求に対しての必然の表れとして参詣者を宿泊する形態が生まれたことである。古代では純粋な信仰を持った参詣者に対して宗教的教義などにより宿泊させている、一方で中世には宿坊経営自体にその経済的期待がみられる。

近世初頭には発展をたえず阻止している幾多の障壁が山積みしていた。山賊・海賊・戦争・関税等がその主たるもので、この障壁の大半を除去した織豊政権が、参詣の発展に寄与した功績は大きい。さらに江戸時代に入るとは、民衆の多くが参詣の経済的・身分的可能性を獲得した上、さらに参詣を援助する講・頼母子等の共同体的結合が広汎に普及した。さらに、交通環境の好転により、旅にまつわる苦行性が解消し、多くの民衆を旅へと駆り立てる結果となった。人々は参詣を口実として続々と出国するようになり、自然と参詣が本質的に具有する信仰的意義は、次第に薄れて参詣は遊楽化した。以上諸々の条件の累積により、膨大な数の民衆を年々吸引するに至った。伊勢参宮は特に近畿参詣の主軸をなし、それが連鎖的かつ複合的に他の近畿並びに沿道諸寺社の発達を促す一因となった。

幕末期の動乱と明治維新は一般に仏教への信仰

を希薄化した。一方で、女人禁制の廃止は特定の霊場の参詣量を増加させ、近代化により台頭した参詣鉄道と汽船は苦行性を減らした。しかし、対外戦争の勃発で敗戦が色濃くなるに連れ、旅行は制限され、受け入れ側の寺社においても軍隊に接収されるなどの影響がみられ、その結果参詣活動は一時鈍化したと言える。

終戦後、交通網の発達は一ハード面における物理的障壁を取り払い、情報化社会の到来はソフト面において参詣の内因的要因を醸成した。一方で寺社の実生活における影響の希薄化により内面的要因である信仰心による参詣は近代までと比べて格段に減り、主に観光にシフトした。以上の要因が外国人観光客という新しい参詣者層を生み、宿坊の将来における光となった。一方で日帰り参詣が可能となり、コンパクトな参詣へと変貌している。信仰心の変化と相まって、近年の高齢化により参詣講などの団体参詣が減少傾向にある。

2-2. 参詣史から紐解く宿坊の不変的性質

参詣史を一貫してみると宿坊の性質として布教性、経済性、コミュニティ性、立地性が導出できる。

「**布教性**」宿坊に宿泊するにはまず、布教という前段階があった。また、宿坊は参詣の作法を教え、参籠の場を提供する。直接宿坊で神仏のもとでお籠りすることで信仰的充足感が得られ、より大きな霊験に与れると信じられていた。そのため、宿坊は信仰心のない人にも教義に触れる機会を創出すると言える。

「**経済性**」寺社の経済的基盤の動揺は直接参詣を促した。宿坊は参詣人を受け入れ、彼らは宿坊を営む僧侶や神職、あるいは御師などに対して宿泊の対価だけでなく、時に参詣の世話料や祈祷料、お札代なども支払う。特に講など宿坊との師旦関係の結びつきは経済的に重要な役割を果たした。

「**コミュニティ性**」師檀関係は宿坊と参詣者の間の

	古代	中世	近世	江戸	近代	現代
参詣関係	<p>平安</p> <p>貴族の遠隔参詣</p> <ul style="list-style-type: none"> ・撰家を中心とする貴族層の土地集積による遠隔参詣への経済的条件確立 ・院政時代には上層の遠隔参詣 ・国司による貴族への奉仕 <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・寺社への宿泊が散見 ・宿坊の利用は主に貴族 ・衆生済度の教義から宿舎として寺院が旅人に役立った 	<p>鎌倉・室町</p> <p>武士の遠隔参詣</p> <p>有力商人・農民が次第に参加（武士・民衆の経済的成長）</p> <ul style="list-style-type: none"> ①信仰の伝播 ・僻地・山間の寺社を中心に直接参詣の誘致 ②交通の発達 ・旅宿の発達、貨幣の流通 ③寺社の受け入れ体制 ・先達・御師・宿坊の発展 ・師旦関係の締結、旦那廻り ④社会の援助 ⑤民衆の成長 ・身分の解放、参詣講の形成 <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遠隔参詣の障壁の軽減 ・宿坊経営に経済的期待が生まれる ・師旦関係は信仰から経済的関係へ 	<p>安土桃山</p> <p>武士の離脱開始</p> <ul style="list-style-type: none"> ①戦乱の終結 ②山賊・海賊の鎮圧 ③關所の撤廃 ④道路の整備 <p>↓</p> <p>平和の到来により人々の往来は自由に</p>	<p>江戸</p> <p>全国的な民衆の遠隔参詣</p> <ul style="list-style-type: none"> ①民衆の上昇 ・経済的・身分的に参詣を為し得るものが増大 ②交通環境の好転 ・乗り物や輸送組織の発達 ・金銀貨の流通 ・旅宿設備の充実 ・盗賊の減少 ③参詣の遊楽化 ・物見遊山色の発生 ・寺社門前の遊女屋の存在 ④乞食参詣の横行 ・参詣を生活手段とする乞食が散見 ⑤御師・宿坊の発達 ・宿泊客の多い合いが多発 ⑥講の発達 ・封建的規制の重みによる ・共同体的親睦的機能が重要に ⑦封建的規制 ・領主による参詣の制限が ・近世における唯一の障壁 	<p>明治・大正・昭和</p> <p>参詣活動の混迷</p> <ul style="list-style-type: none"> ①明治維新 ・神仏分離 ・廃仏毀釈 ・修験道廃止令 ・一仏教信仰の希薄化 ・女人禁制の廃止 →参詣量の増加 ②参詣鉄道の台頭 →苦行性の更なる減退 ③対外戦争の勃発 →参詣活動の鈍化 <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多くの寺社で宿坊が減少 ・霊場がより一層世俗化 ・現代的参詣の原形 ・寺社領の剥奪で経営難に 	<p>現代</p> <p>観光化</p> <ul style="list-style-type: none"> ①交通網化 ・モータリゼーション ・空路の発達 →一立地的特権の剥奪 ②情報社会化 ・インターネット、SNS、スマートフォン →普及 →情報不足の解消 ③信仰心の変化 →一信仰による参詣が減少 <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ①新しい参詣者層 ・観光客 →一宿坊での布教 ②日帰り参詣 →一宿坊の利用減少 ③団体参詣の減少 ・講の減少 ・宿坊の個室化 →一定期的収入減少
寺社経済関係	<p>寺社の国家宗教による強い保護</p> <p>その後</p> <p>律令的経済体制の衰微により国家から貴族へ</p>	<p>荘園制の衰退</p> <p>経営基盤が武士・民衆へ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・寺社財政制度の変質・崩壊による参詣活動の積極的誘致 ・宮座の発展→近代氏子制度の基礎 	<p>武士による荘園の押領</p>	<p>中世より格段に遊楽化（依然、信仰による参詣も存在）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一度の旅で複数の霊場へ→霊場間のコミュニティ形成 ・遠隔参詣の情報収集機能の役割 ・民衆の大量参加による参詣かつ宿坊の隆盛 	<ul style="list-style-type: none"> ・寺社領が地権により剥奪 →一朱印地・黒印地が付与される ・寺請制度・触頭制度、本末制度の成立 →一末寺に対する経済的圧迫が民衆へと転化 	<p><寺院の経済基盤による分類></p> <p>「檀家寺」「観光寺」「信者寺」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・葬儀業者の出現 ・檀家制度の衰退 ・氏子の減少 →後継者不足
一般史	<p>538 仏教伝来</p> <p>743 墨田永年私税法</p>	<p>鎌倉幕府</p> <p>1221 承久の乱</p> <p>1467 応仁の乱</p> <p>1493 明応の政変</p> <p>封建社会の始まり</p> <p>→朝廷の権力の失墜</p>	<p>織田信長、豊臣秀吉</p> <p>全国統一</p>	<p>江戸幕府</p> <p>幕府の宗教政策</p>	<p>1868-1876 廃仏毀釈</p> <p>1871&1875 神仏分離令</p> <p>1871&1875 寺社領地上令</p> <p>1947 農地解放令</p> <p>1948 旅館業法</p> <p>1951 宗教法人法</p> <p>1894-1945 対外戦争</p>	<p>2018 住宅宿泊事業法（民泊新法）</p>

図2 寺社参詣史の概略

深い結びつきであった。参詣講が宿坊へ定期的に訪れることは参詣を通して講員同士の結束を固める目的がある。その目的地であり、共同体生活を行う場所として宿坊の役割は大きい。宿坊には多数の地域から参詣人が集まるために情報交換の機能もあった。さらに、次の霊場への中継地として利用され、間接的に他の霊場との間で影響を与え合い、宿坊同士の広域的なコミュニティを形成していたと言える。しかし縁者を大切にするため、無縁者に対して排他的な一面もある。

「立地性」参詣の栄枯盛衰は交通と深い関わりがあった。宿坊の多くは基本的に交通環境が悪い山中や山麓にある。現在のような交通環境と相まって遊楽化した旅行では次の観光地への拠点とはなりにくく、その特異な立地が足枷となっている場合もある。

3. 寺社の経営からみた現代における宿坊の実態

3-1. 宿坊の寺社の経営面における重要度

寺社における宿坊の重要度をみると(図3,4)、神社系宿坊は寺院系よりも経済基盤が弱く、宿坊への依存度が高い。寺院と神社とで違いがみえる。また、宿坊経営がなければ立ち行かなくなる寺社が一定数存在しており、宿坊の持つ経済規模が寺社にとって無視できないものになっていると言える。

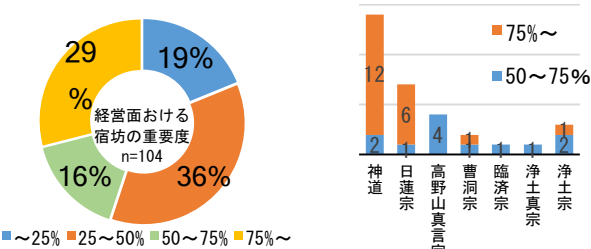


図3 宿坊経営の重要度

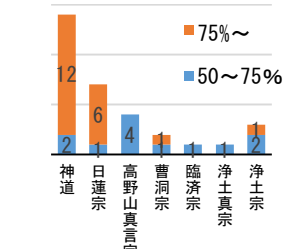


図4 重要度 50%以上の宿坊×宗派

3-2. 宿坊経営の現状

「現在の運営上の問題点」下作業の人員不足、日本人の生活様式の変化と旅館・ホテル慣れが完全個室や洋室を要求し設備の古さに苦言を呈する人は多く、宿坊の伝統性と対峙している。

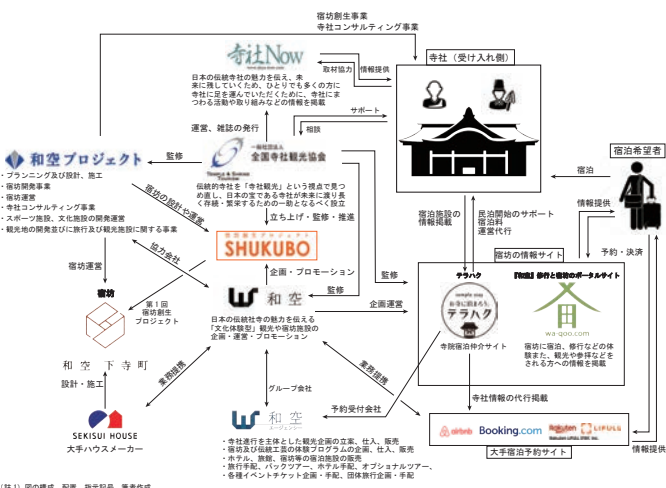


図5 宿坊新規開設支援体制

「寺社側の宿坊開設への機運の高まり」全国寺社観光協会によって寺社向けに発行された雑誌『寺社 Now』には宿坊に関する記事が頻見され、寺社の新たな収入源として宿坊が紹介されている。それに呼応して宿坊を開設する支援体制が全国寺社観光協会と私企業によって作られている(図5)。

「高級宿坊の登場」近年3万円を超える高級宿坊ができています。運営には必ず企業に関わり、富裕層の外国人観光客をターゲットに宿坊のブランディング化や販促を積極的に行っている(表1)。

表1 高級宿坊一覧

名称	開設年	価格(1棟貸し)	企画・運営
福井 永平寺	2019年(秋)	2万円~(1名料金)	藤田観光株式会社
京都 仁和寺	2018年	100万円~	委託
京都 真如寺	2016年	23.9万円~	日本財団、NPO法人京都文化協会、ハイアットリージェンシー京都
京都 海宝寺	2016年	23.9万円~	〃
京都 永明院	2016年	23.9万円~	〃
京都 大慈院	2016年	23.9万円~	〃
京都 光雲寺	2016年	23.9万円~	〃
滋賀 三井寺	2018年	30万円~	株式会社和空プロジェクト
山梨 望月庵	2018年	8.6万円~	株式会社シティリンクス 株式会社キャンプサイト
岐阜 高山善光寺	2017年	4万円~(一部雇賃)	株式会社シェアウィング

3-3 宿坊の将来的展望

現在、信者の金銭的援助に暗雲が立ち込めている寺社にとって宿坊は信者との繋がりを持ったまま、観光客を取り込むことができる事業であり今後、宿坊を経営的基盤の一つとする寺社が増えると考えられる。その際、寺社単独ではなく企業の進出が傾向としてみられる。知恩院和順会館では大手ホテルチェーン運営会

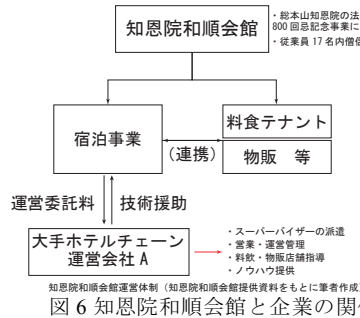


図6 知恩院和順会館と企業の関係

社Aから技術援助を受けている(図6)。つまり人手不足を補う企業、新規宿坊開設を支援する企業、宿坊の持つ経済規模に目をつけた企業などの宿坊への進出が将来的

にさらに加速すると考えられる。

4. 観光からみた現代における宿坊の実態

4-1. 観光書籍における宿坊の紹介のされ方

7冊の観光書籍について文章(図7)と写真(表2)について分析する。その結果文章からは、まず、長時間滞在し時間的・場所的条件を満たすことで享受できる宿坊独自の限定的な体験の存在が特徴的である。次に、敷居の低さのアピールが目立つ。これは一般の人

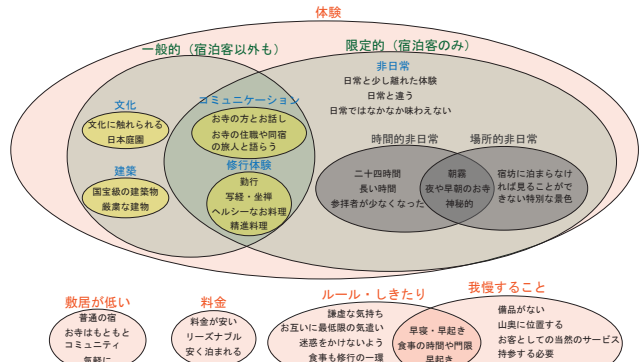


図7 書籍における宿坊の特徴

にとって宿坊の敷居が高いことを示し、それを打破しようとする寺社側の姿勢の表れである。最後に、宿坊のルールやしきたりを守り、不満に対して我慢する必要性がみられ、他の宿泊施設と反対の構図になっており、またこれらは一般の宿泊施設では欠落しがちな人間性を培うことに寄与するという3つの側面が表れた。

写真については掲載宿坊数に対して客室の内容を伝える写真が少ない。一般的にはどのような空間で一泊を過ごすかという評価基準が重要になるのに対して、宿坊紹介書籍においては宿坊独自の食事や庭園、建築物という点に着目するのはもちろんのこと、隣接する本堂/神殿や周辺環境という寺社全体を取り巻く面的な要素が重要になっているという側面が表れた。

つまり観光書籍では、一般的な宿泊施設に無い、宿坊に潜む霊験的体験を言語化や現像化することによって表現しようとしており、宿坊では特にその霊験的体験が重要であると言える。

表2 書籍の写真分類

出版年月	タイトル	宿坊掲載数	客室	自然庭園舎	食事	外観	内観客室除	基礎知識	体験	住職紹介
2005年1月	お寺に泊まろう 最新版全国宿坊ガイド	32	36	50	26	76	42	あり	16	32
2010年5月	最新版 全国宿坊ガイド「お寺に泊まろう」	38	31	52	29	84	40	あり	13	37
2010年12月	神社に泊まる	16	19	41	16	52	25	あり	0	0
2012年10月	神社に泊まる全国宿坊ベストガイド	103	35	46	51	133	69	なし	34	0
2013年5月	ハート美人になれる宿坊ガイド	45	34	29	45	56	38	あり	43	3
2015年3月	こころ美しく京のお寺で修行体験	5	5	5	5	8	7	あり	6	0
2018年7月	高野山の宿坊公式ガイドBOOK	52	30	48	16	70	54	あり	13	0

→宿坊掲載数よりも少ない項目 →客室写真よりも多い項目

4-2. 外国人宿泊者のクチコミにおける宿坊

多くの外国人旅行客が利用する<Booking.com>に寄せられたクチコミを調査する。クチコミ数が同程度で異なる霊場である身延山覚林坊、高野山普門院の2件を本稿では取り上げる。

良い点で共通しているのは朝勤行・精進料理・庭園・寺院の建造物など、日本の伝統文化の体感であり、一般の宿泊施設とは明らかに異なり宿坊独自の特徴であると言える。そのほか、伝統・歴史・綺麗・雰囲気・リラックス・ユニークという抽象的な記述が目立った。宿坊の特異な立地が作り出す早朝の荘厳な雰囲気や深々なる冷え込みなどは言語化することが難しいためであると言える。

悪い点は入浴時間の制限、宿坊内の寒さといった宿坊特有の指摘が共通していた。入浴時間の制限は客室にバストイレがない、入浴時間が一般的な旅館やホテルに比べて短いかつ朝風呂がない。そのほか坊内の寒さは立地上の問題や伝統的な建築による。つまり外国人も日本人と同様、精神的・身体的不便さに対しては忍耐が必要であることを示している。

4-3. まとめ

宿坊が広く一般人に門戸を開き、人間性を培う場としての側面がみられた。また、宿坊には実際に赴いてこそ得られる霊験的体験が存在し、それを観光書籍やクチコミといったツールが現代版の御師として、言語化や現像化に寄与している。

5. 建築的視点からみた現代における宿坊の実態

5-1. 宿坊の建築形態による分類と分析

建築形態と宿坊の収容人数の関係について統計的にみると(表3)、建築形態の違いによってデータにはばらつきがみられる。複合型を抜いた寺社仏閣型、会館型は標準偏差が大きく、その建築形態の多様な分布を示している。旅館型も複合型を含めると標準偏差が大きくなり、複合化することにより多様化していると言える。建築構造と階数で宿坊の建築形態をみると(図8)、途端に多様性がなくなる。宿坊は木造が多く78%が1~2階建てであるため、鉛直方向に多様性がなく、むしろ増築による複合化や様々な規模の収容人数の存在によって平面的に多様化していると言える。

表3 建築形態と収容人数の統計データ

(複合型抜き) 単位:人	民宿型	寺社仏閣型	旅館型	会館型	(複合型含む) 単位:人	民宿型	寺社仏閣型	旅館型	会館型
平均値	35.5	53.7	45.5	101.8	平均値	37.4	60.2	66.6	112.3
標準偏差	22.5	50.8	22.6	65.8	標準偏差	25.1	55.3	55.7	65.7
中央値	30.0	40.0	40.0	80.0	中央値	30.0	40.0	50.0	110.0
最大	85.0	200.0	120.0	220.0	最大	100.0	300.0	300.0	240.0
最小	6.0	5.0	20.0	15.0	最小	5.0	5.0	20.0	15.0
件数	15件	35件	21件	15件	件数	25件	59件	38件	18件

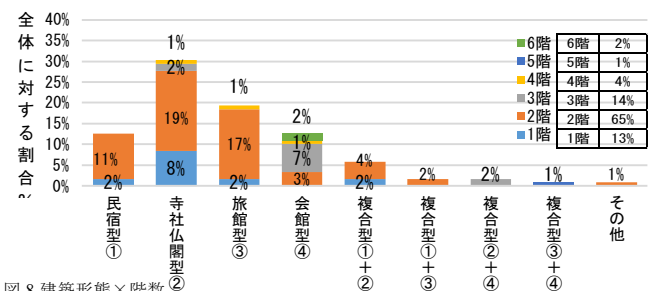


図8 建築形態×階数

5-2. 本殿/神殿との位置関係

図9は宗派別にみた本堂と神殿の位置関係を示す。神道系は内包型の割合が高いのに対し、仏教系では内包型の割合が最も低い。仏教系の宿坊は伝統的な本堂と遠すぎず、近すぎずという位置関係にあると言える。客室から本堂などの寺院関係の建物、自然が一体となった景色を望むことができる。これは一般的な旅館やホテルでは見られない特徴である。また、宿坊では本堂/神殿があるため、新築は減多に行えない。そのため本殿/神殿の存在が増改築の際に制限を加えている。

	神道	真言宗	高野山真言宗	天台宗	浄土宗	浄土真宗	日蓮宗	曹洞宗	臨済宗	仏教
内包型	33	1	2	1	2	1	1	3	3	7
隣接型	5	4	19	6	1	1	7	3	3	44
離れ型	2	2	3		1	1	3	1	4	15
独立型	1	3	2	1	1	1	1		1	9
総数(件)	41	10	26	8	5	2	12	4	8	75

図9

5-3. 宿坊と庭園の関係性

庭園位置と建築形態の関係を見ると(図10)、寺社仏閣型は隠れ型が多く、さらに庭園を強みと回答している寺社仏閣型も多い。これは庭園の観賞を制限し、

特定の客室から観賞できるようにすることで、客室の差別化や宿泊客の誘致に利用しているためである。つまり現代の宿坊と庭園は仏教思想との関係に加え、経済的な役割も付与されていると言える。

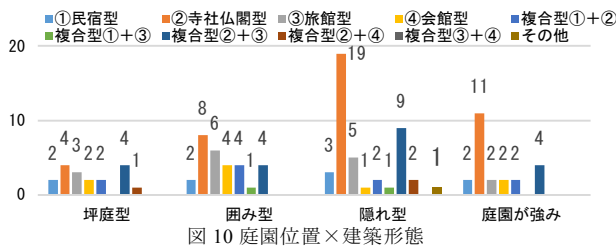


図 10 庭園位置×建築形態

5-4. 現代における広間の汎用性と客室の変容

宿坊の広間の使われ方をしてみると、広間が多様な活動の場として利用されている。一般の旅館と異なり、広間が食事や宗教体験の場、客室として利用されたりと、宿坊にとって汎用性のある広間は業務の重要な一端を担っていると言える(図 11)。

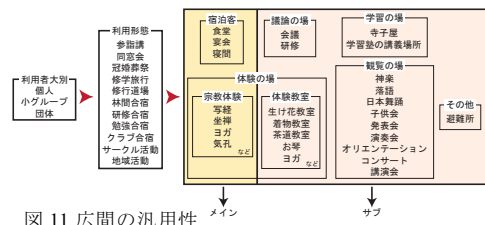


図 11 広間の汎用性

客室の変容についてみると、宿坊の客室は襖仕切りが一般的であったため、襖を開け客室同士をつなげることにより、様々なタイプの客室を作る可変性があった。しかしながら、日本人の生活レベルの上昇によって、襖は壁となり個室化が進んでいる。一方で、現代化が進む中で、宿坊は緩衝室(空室)を配置して宿泊客への配慮(図 12)や襖絵を残して個室化するなど客室の伝統性を残そうとする試みがみられる。

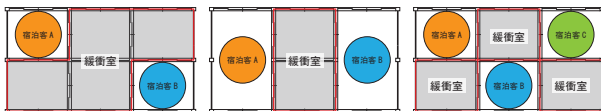


図 12 客室配置の例

5-5. 宿坊の設備の更新に伴う伝統性との対峙

時代が進むにつれて宿坊は現代的設備を取り入れてきたが、宿坊の伝統性や運営上の制約が客室のトイレの完備を阻んでいると言える(図 13)。

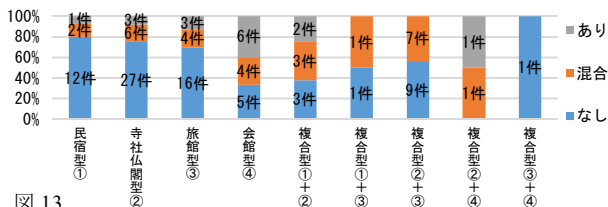
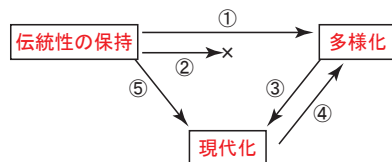


図 13

5-6. まとめ

建築的視点から見たときの宿坊の実態の関係性をまとめると以下ようになる(図 14)。一般的な宿泊施設と異なる制約によって、宿坊では建築形態が多様化し、寺社経済の希求により広間・庭園の役割が多様



- ①本堂/神殿に干渉しない増改築→ハード面
- ②鉛直方向の多様性の少なさ
- ③一般人への門戸拡大
- ④現代化により広間・庭園の役割が多様化→ソフト面
- ⑤完全な現代化を制約

図 14 建築的視点からみる現代の宿坊

になったと言える。そして多様化することで、現代のニーズにあった宿坊を生み、門戸を開いている。

6. 立地からみた現代における宿坊の実態

図 15 に示した 395 件の宿坊の立地をみると、1 件も宿坊のない都道府県があり、宿坊特有の立地性がうかがえる。さらに、京都を除いて都市部には少なく、山間などの僻地に多い。一方で、黄色の旧主要街道沿いに広く分布しており、交通手段はあると言える。



図 15 宿坊の分布図

7. 宿坊の特質の考察

現代における宿坊の実態の相互の関係性に加え、宿坊の性質を現代の宿坊の実態という網目を通して現代社会における宿坊の特質を明らかにする。

7-1. 現代における宿坊の実態のまとめ

3~6 章の要点をまとめたのが図 16 である。宿坊の実

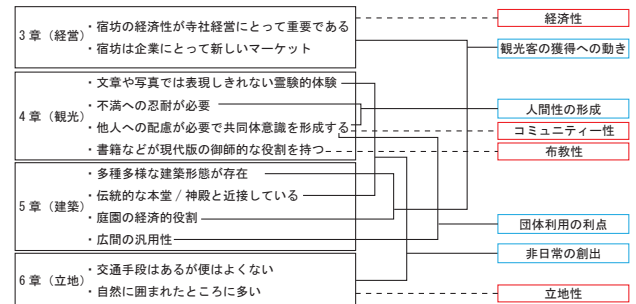


図 16 宿坊の性質の関係性

態が性質に影響を与えていることがわかる。また実態について総合的に見ていくと経営面における実態、多様な建築形態の存在と庭園の経済的役割は観光客の獲得の流れに起因しており、霊験的体験や本堂/神殿との近接、特異な立地が非日常の創出に参与し、不満への忍耐や他人への配慮が人間性の形成に影響し、そし

て、共同体意識の形成は団体利用の利点であり、それを広間の汎用性が可能にしている。

7-2. 現代における宿坊の実態からみた宿坊の性質

「布教性」元来、布教とは歴史的に見ると寺社側が積極的に足を動かして行く能動的なイメージが強い。しかしながら宿坊では受け入れることが布教になり、布教的でないから布教的であるという独特な布教性を持っている。教を担っていた御師に代わり、書籍、SNS、インターネットという布教ツールの変容と建築形態と広間・庭園などの役割の多様化は宿坊の宗教色を希釈し一般の人々にも広く門戸を開くこととなった。

「経済性」宿泊料や信者化による経済的援助という面で経済性がある一方で、寺社という伝統的な建築を維持に掛かる経済的負担は重く、経済性があるとは言えない。また、宿坊は企業の新しい市場として注目されている。つまり宿坊の経済性は寺社経済の範疇を超えてきていると言える。

「コミュニティ性」一般的にコミュニティは常に一緒であるが、宿坊では常に一緒とは限らない。一方、関係者以外は境内に入れないなど、排他的一面も見られ、コミュニティ性がある一方で、反コミュニティ性がある。宿坊では一般の宿泊施設と比べて他人と共有する空間が多いため他人への配慮が必須で自然と宿泊客同士の間でコミュニティが形成される。宿坊の共同生活的な空間と広間の汎用性によって可能となる団体活動が共同体意識を形成する。つまり宿坊を介してコミュニティを形成することができる。

「立地性」宿坊は離れていて交通の便が全くないわけではなく、良いわけでもない、修行性も遊楽性もある、どっちつかずな立地である。標高の高い山間・山裾、そして山中にあり、近傍に本堂・神殿などの伝統的要素が合わさることで言語化や現像化しきれない霊験的な体験が宿坊で得られる。僻地にある宿坊の不便さによって自分の生活を客観視できるかつ、立地による自然環境の厳しさが宿泊客の忍耐力を形成する。

以上、つまり4つの性質にはそれぞれにアンビバレントな関係を持つという特質があると言える。

ここまでの知見を統括する。宿坊の性質は図17の関係となる。布教性が持つ宿泊の際の宗教教義の伝播は信者化の可能性を持ち、コミュニティ性による研修・修学旅行の獲得は定期的収入となる。また都心部から離れた立地はコミュニティの形成に役立つ。

そして宿坊の性質と現代の実態が関連している。つまり、布教性が布教的でない側面は観光客に対して敷居を低くし、布教的である側面は宗教体験などの非日常的な体験を創出する。宿坊の持つ経済性が観光客の獲得を促し、団体利用による利点も経済性にある。コミュニティ性は利用者側にとって団体に利用する

意義を見出し、人間性の形成にも寄与する。そして立地性が生み出す自然環境や宿坊内の不満などが非日常を創出し、人間性の形成に役立っている。

以上のように現代において宿坊の性質はそれぞれ関連し合っている。宿坊が多様な広がりを見せている要因はここにあるといえる。

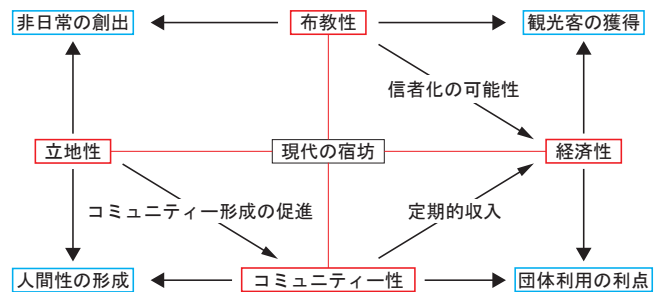


図17 宿坊の性質の関係性

8. 結論

宿坊の現代における実態について言及すると、寺社経済の困窮によって宿坊の観光化が一層進み、多種多様な人々の受入拡大、新しい市場として企業の進出、宿坊内の現代性と伝統性の混在によって多様化している現状があり、まさに転換点にある。そして現代の宿坊が持つ性質はアンビバレントな関係を持ち、それが個々に関連し合うことで、寺社側の需要と利用者側の需要が宿坊を介して満たされている。その宿坊独自の特質が社会の流れの中で、現代のニーズに合った多様な展開を可能にしている。

現在において宿坊は真なる宿坊、旅館的な宿坊、宿坊的な旅館に分かれているために、旅館と見分けが付きにくい。それは上述したような宿坊独自の特質があるからである。4つの性質が全て集まるものは間違いなく宿坊であり、何か1つ抜け落ちるとぼやけて旅館と混同してしまう。以上の知見を統括すると、現代の宿坊は広辞苑における「寺院に参詣した人の宿泊する寺坊³」というのではまったく説明仕切れていない。そこで、これまでの知見を元に以下のように現代の宿坊を定義したい。

「特異な立地にあり布教性と共同体意識を醸し出す、寺社が運営に関わる宿泊施設」

現在の宿坊は寺社に参詣人のためだけにあるものではない。宿坊には精神的、身体的に不便なところが存在するが、そこに世俗から離れ、今一度自らの生活レベルを客観視し、人間性を培うという潜在的価値がある。真なる宿坊は他の宿泊施設とは一線を画している。

■参考文献・注釈

- 1: 日本政府観光局 (JNTO) 「訪日外客数」
- 2: 華嚴宗、法相宗、律宗、真言宗、天台宗、日蓮宗、浄土宗、浄土真宗、融通念仏宗、時宗、曹洞宗、臨済宗、黄檗宗
- 3: 新村出編 (1975) 『広辞苑』 第二版、岩波書店。その他、西垣春次 (2002) 「宿坊」長谷政弘編『観光学辞典』同文館出版 p45によると僧侶の僧坊、または参詣人宿泊のための寺坊のことをいう……神社の御師の屋敷も宿坊のうちに数えられる。……と神社も含めて記述されている点で広辞苑よりも精度が上がっているが、宿坊の正確な認識には程遠いと言える。